



撮影協力/株式会社紀和産業 製造部第4課・課長の成田勝正さん(29歳)。「ベテランから技術を受け継ぎ、次の世代にも伝えていきたい」と話す。

不況に  
打ち勝つ!

機械がものをつくるのではなく、人がものをつくる。  
不況の今、この当たり前前の原点に戻ろうと思う。

株式会社紀和産業 代表取締役会長 村越紀夫さん

PICK UP ① 熟練と若手がひとつの仕事に共に取り組む  
**株式会社紀和産業**

PICK UP ② 地元密着で成長を続ける豆腐店  
**株式会社須部商店**

PICK UP ③ 埋もれている「光」を大きく育てるために  
浜松商工会議所 **やらまいか浜松**

**E-LINK**

思いと技術を未来へ繋ぐものづくり応援誌 Vol.9





## この不況を 若手を育てるチャンスに変える。

株式会社紀和産業



(上) すべての製品が特殊なオーダーメイド品。一人ひとりに高い技術が求められる。(左下) ベテランから若手へ技術や経験を伝えていく。今こそが「伝承」に時間を割くことができる最大のチャンス。(右下) 紀和産業が生み出す真空パイプや真空関連製品は、さまざまな業界から高い評価を得ている。

紀和産業は、真空配管や真空フランジなどの真空機器部品の製造を手掛けている。作り出す製品のすべては特殊なオーダーメイド品。そこには高い技術が要求される。

この経済不況は、紀和産業にとっても他人事ではない。昨年と同時期と今年を比べれば、仕事量は減少している。しかし「今の時期だからできることがある」と、代表取締役会長の村越紀夫さんはいう。

「これまでのような忙しい時期は、管理者には管理者の仕事があり、“忙しいから”と若手になかなか技術の伝承ができずにいました。ですから今は、ただ不況を嘆いているのではなく、技術や技能の伝承に時間を割ける絶好のチャンスだと思い、社員一丸となって人材育成に力を注いでいます」。

60代の熟練技術者と20代の若手がベアとなり、1つの受注を一緒になって取り組む。月1回の全体会議では、機械をすべて止めて全員が集まり、職場のこと、技術のことなど、さまざまな意見を出し合う。現在の紀和産業では、こうしたベテランと若手が「融合」した光景をあちこちで見ることができる。

「しっかりと若手を育てていくことで、景気が回復した時により稼働率を上げることに繋がっていくはずだと考えています」(村越さん)

じっと耐えているだけでは、いざという時が来ても、すぐに飛び立てない。「その瞬間」に向けて着々と準備を進めていくこと。今日も紀和産業の製造現場では、ベテランと若手がひざを突き合わせて、「これから」を見据えてものづくりに向き合っている。



代表取締役会長・村越紀夫さん。

### ●株式会社紀和産業

事業内容／真空フランジ・真空配管・各種産業精密部品などの製造 従業員数／50名 設立／昭和52年 所在地／静岡県浜名郡新居町新居1984-2



浜松市の最北端。緑が連なる赤石山脈を望む都田町は、浜松の奥座敷と言われている。この都田で130年間にわたり豆腐を作り続けてきたのが須部商店だ。

須部商店には、代々言われ続けた経営訓がある。「豆腐には旅をさせるな」。五代目である専務取締役の須部治さんはいう。

「まずは、しっかりと地元で消費してもらおうことが大事だという意味です。豆腐は日持ちがしない商品です。事業を大きく展開しようとするれば、日持ちさせるための設備投

資をしなければならない。1丁100円の売り物に莫大な費用は掛けられない。ならば地元の消費を大切に、身の丈に合った経営をすること。これが我が店の教えです」。

先代からの教えを守り続ける一方で、「都田の豆腐」の付加価値をつくる新しい挑戦も続けている。大豆を豊富に使った豆乳、桜エビやオクラを使った変わり豆腐、豆乳シュークリームやおからパウンドケーキなどのスイーツ……商品ラインナップは広がり続けている。

その集大成が月1回開催される「豆

腐祭り」だ。築80年の古民家を改装した会場では、できたての豆腐をはじめ、あらゆる商品が販売されるほか、地元産のしらすや海苔も販売する。甘酒やみそ汁が無料でふるまわれ、時には太鼓演奏などのパフォーマンスで盛り上がる。

「豆腐祭りは、私たちの集大成です。社員も盛り上がり、地元の人たちも盛り上がります」（須部専務）。無理に旅をさせずとも、こうして受け入れてくれる地元の人たちがたくさんいる。これからも「都田の豆腐」は地域の人々に愛され育っていく。

### ●株式会社須部商店

事業内容／豆腐・油揚げ・こんにやく・惣菜・菓子などの製造販売  
従業員数／45名 創業／明治10年 所在地／静岡県浜松市北区都田町6515



専務取締役・須部治さん。斬新な発想で「新しい豆腐屋の姿」を目指す。

## 豆腐には旅をさせるな。——株式会社須部商店



(上) 17年前には数億円をかけて新工場も建設 (下) 六代目となる息子の優くんは12歳。今回も豆腐祭りのお手伝いに参加した。右は五代目の母であり、現社長 (四代目) の須部かつこさん。



3年前から始めた豆腐祭りは、今年3月の開催で42回目を迎えた。約2時間の祭りは、毎回1000人以上が来場するイベントへと成長している。地元の人、うわさを聞きつけて、県外からも大勢の人が駆けつける。販売所にはいつも長蛇の列ができる。





**地域で育む地場のチカラ。  
まずはみんなで「やらまいか」。**

「やらまいか」とは、遠州地方の方言であり、「Let's try!」という意味だ。どうするか?という岐路に立った時、止めるのではなく「考える前にやってみよう!」という遠州人気質を表す言葉でもある。

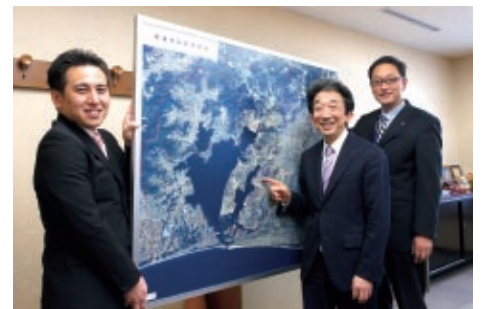
このやらまいか精神を具現化し、地域活性のために4年前からスタートさせたのが、浜松商工会議所が中心となり推進する「やらまいか浜松」という地域ブランドの展開だ。食品、工業品、繊維、工芸品など、ブランドに選定されている商品のジャンルは幅広い。

浜松市は、楽器、二輪車、染色など、日本を代表するメジャーメーカーを有している。しかし、大企業に頼り過ぎる体質は、知らぬ間に市全体の活力を奪うことにもなりかねない。

大企業にばかりスポットを当てるのではなく、未来のために「埋もれている光るもの」を大きく育てる。名だたる起業家を輩出してきた遠州の底力をもう1度取り戻し、浜松市のものづくりの技術を多くの人に発信していきたい。「やらまいか浜松」には、そんな思いが込められている。

現在、ブランド認定商品は71品目。応募された商品を20名の審査員が「商品力」「挑戦的で積極的なことに挑む『やらまいか精神』の有無」などを基準に選定している。また「やらまいかブランド巡り」と題した工場見学ツアーも実施し、観光客はもちろん、「こんな会社があるとは知らなかった」と地元の人にも好評を得ているという。

ブランド選定委員でもある(株)サカエの代表取締役社長・神谷竹彦さんはいう。「人間は一人では変わらない。だからお互いに刺激しあいながら新しい方向性を見出していく。地域一体となつての“やらまいか”が、これからの浜松市の新しい力を生み出してくれると期待しています」。



左から、浜松商工会議所・商業観光課の名波佳紀さん、(株)サカエの代表取締役社長・神谷竹彦さん、次長兼商業観光課長の空屋英夫さん。地域全体で「やらまいかブランド」を育てていきたいという。

**E-LINKのWeb版「E-LINK online」でもさまざまな情報を発信しています。本誌とあわせてご覧ください。**

【ものづくり企業・新世代の経営戦略】「“当たり前”をくつがえすことから始めた会社づくり」 株式会社須部商店 須部治さん

【表紙インタビュー・20代の肖像】「まずは自分でやって見せる。12名の部下に声をかけながら進めます」 株式会社紀和産業 成田勝正さん

【ものづくりの先達からの伝言】「経営者の社会貢献は“いい会社をつくること”」 株式会社紀和産業 代表取締役会長・村越紀夫さん

●定期購読のお申込みのほか、最新記事やE-LINKのバックナンバーなどの情報がご覧になれます。<http://www.k-ktec.co.jp/elink/>

発行/ケーテック株式会社 所在地/〒431-0451静岡県湖西市白須賀3985-2716 連絡先/電話:053-577-2002(代) E-mail:elink@k-ktec.co.jp

発行日/隔月1日発行(次号は7月1日予定です)